

巻頭言



BSE・大豆・アマゾン

北海道大学公共政策大学院 教授

—— 石 弘之*

世界の穀物生産量の約 3 分の 1 は家畜飼料として使われている。世界的に肉食消費量が拡大するなかで、飼料が世界の農林水産業を揺さぶる震源地となってきた。日本の飼料自給率は 24% しかない。このために、世界の飼料穀物貿易に占めるわが国の割合は 23% と世界でもっとも多い国の 1 つであり、ここでも「輸入大国」だ。その飼料に大きな異変が起きている。

ブラジル環境省は最近、「2004 年 8 月までの 1 年間にアマゾンの森林破壊面積は 2 万 6,130 平方キロメートルに達し、それ以前の 1 年間に比べて 6 % 増加した」と発表した。この面積は長野県 2 つ分に相当し、年間の破壊面積としては 1995 年に次ぐ広さだ。

この破壊の原因は、木材伐採に加えて肉牛用の牧場造成と、アマゾンに急拡大してきた大豆栽培だ。これまでも、世界的に大豆ブームが起きるたびに、アマゾンの熱帯林は焼き払われて大豆畑に転換されてきた。

ブラジルの大豆は、40 年前には日系農民が自家用に細々と作っていただけ、その存在を知らない農民の方がほとんどだった。ところが、いまや米国に次ぐ世界で 2 番目の生産国にのし上がった。日本の大豆の輸入先としてもブラジルは米国に次いで 2 番目だ。

ブラジルの大豆ブームは、1970 年代に入って起きたペルー沖のアンチョビー（カタクチイワシ）の深刻な不漁によって火がついた。アンチョビーの魚粉は当時、もっとも重要な蛋白飼料であり、家畜業界はこの代替品の大豆や大豆粕に殺到して価格が暴騰した。

日系農民以外にも、多くの農民がなだれを打って参入してきた。アマゾンの気候や土壌は大豆に適していなかったが、新品種の開発で栽培が可能になり、生産は爆発的に増えていった。実際に、アマゾン南部に広がる大豆畑の上空を飛行機で飛ぶと、30 年ほど前には厚い熱帯林でおおわれていた地域が、360 度どっちを向いても地平線まで大豆畑に変わっている。

今回の大豆ブームは 2002 年後半からはじまった。狂牛病（BSE）が世界各地で発生するにつれて肉骨粉などの動物蛋白質が家畜の飼料として敬遠され、ふたたび大豆需要が急増してきた。だが、日本や EU では消費者が反発していることもあって、遺伝子組み換え（GM）大豆が大半を占める米国、アルゼンチン、ブラジル南部産は使えない。

世界 3 番目の生産国のアルゼンチンは、米国の大手穀物会社の圧力に屈して除草剤耐性

GM 大豆の作付けを増やしてきた。そのなかで、ブラジルのマットグロッソ州などのアマゾン地域では、「非 GM 大豆」の生産を貫いてきたことが、この地域の需要を大きく伸ばすことになった。とくに、EU では非 GM 大豆が歓迎されて、ブラジル大豆の 3 分の 2 を輸入しているほどだ。このために、シカゴ商品取引所の大豆相場は、2002 年～04 年に 2 倍になり、ブラジルの生産量はこの間に 1.5 倍に、輸出金額は 2.5 倍にも急伸した。

一昨年以來、ブラジル南部のリオ・グランデ・ド・スル、サンタ・カタリーナ州などの古くからの農業地帯が深刻な干ばつに襲われ、場所によっては壊滅状態になった。これも、干ばつ被害のなかったアマゾン地域の増産に拍車がかかった。マットグロッソ州などの北部諸州では 20% もの増収を記録した。

大規模な大豆畑は有力者が所有している場合が多い。ブラジルの主要な大豆生産地にのし上がったマットグロッソ州では、個人としては世界最大の大豆生産者であるブライロ・マッギ氏が知事として君臨する。2003 年に知事に当選したマッギ氏は、就任後の 10 年で大豆の作付面積を 3 倍に増やすことを公約に掲げて、環境保護団体が森林保護を理由に彼の就任に抗議したこともあった。

このマットグロッソ州でも、この 20 年間で広大な面積の森林が大豆畑に変わってしまった。熱帯林が被っていた景色は一変し、平地は地平線まで大豆畑、傾斜地は森林を焼き払って見わたすかぎり牧場が広がっている。

ルラ・ダシルバ大統領の率いる中道左派政府は、国際世論にも配慮して、アマゾン保護を政策に掲げている。だが、一時よりかなり減ったとはいえ、ブラジルは 1,200 億ドル近い巨額の対外債務現実を抱え、返済のための外貨獲得の手段として大豆輸出を後押しする。だが、マリナ・シルバ環境相は、アマゾンで破壊の根本的理由として「急ピッチで進む開発が原因であり、アマゾンの経済のあらゆる側面について持続可能な基準を作らないかぎり、監視と管理だけでは破壊と闘うのは不可能だ」とお手上げの状態だ。

一方、他の石油や鉄鉱石などの資源と同じように、中国の大豆輸入の急増が国際相場を押し上げる原因になっている。中国は世界で 4 番目の大豆生産国だが、ついにオランダ、日本を抜いて世界最大の輸入国に躍り出て、大豆輸入量は 2004 年には 2,225 万トンに達した。これは日本の輸入量の 5 倍を超え、5,840 万トンの世界の貿易量の約 4 割を中国が輸入していることになる。

これ以外にも、150 万トンの大豆油を輸入した。これは 800 万トンの大豆に相当するので、合計で 3,000 万トン近い大豆を国際市場から買い入れていることになる。食生活の向上で肉消費量の増加に伴う飼料や、食用油の需要が増したことが理由だ。

中国では食料品の消費拡大が依然として止まらず、今後とも大量の農産物の調達が見込まれている。食糧の海外依存の高い日本は、国際市場で中国との輸入量確保のバトルが一段ときびしくなりそうだ。